

# 生き方自然に自分流…

日本の社会制度は「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分業を前提としたものでした。しかし女性の職場進出が進み1990年代片働き社会から共働き社会へ移行したように、産業構造・経済の変化により人々の価値観や意識も大きく変わってきました。男女が共に仕事と家庭の労働を分かち合う時代に変化しているのです。

今回お話いただいた三世代(若者、働き盛り、団塊)は、男女の役割の固定観念なく、お互いの個性と能力を尊重し自然に自分流のライフスタイルを続けている方々です。

## 若者世代



三浦 翔さん  
(いわき明星大学人文学部1年)

## 人とのふれあいが大好き

私は、中学・高校時代から子どもとのふれあいやお年寄りとの介護などのボランティア活動をしていたので、大学でもこれまでやってきたことを生かしたいと考え赤十字奉仕部に入部しました。

その活動のひとつが、『いいのふれあい館』での子育て支援です。子どもとのふれあいは、女性の方が適していると思われて、男性は控えめになりがちですが、私は楽しんでやっています。公園などでも、子どもたちを見かけると一緒に遊びたくなるのですが、この頃は不審者と思われたりするから残念です。

将来は、今学んでいる心理学を生かして臨床心理士として活躍したいと考えています。また、家庭をもったら、妻となる人には自分のやりたいことをしてほしいです。共生と自立は家庭生活でも大切なことですから、お互いに無理せず協力し合い、家族を大切にしたいと思っています。

## 働き盛り世代



いわき市平 【左から】  
長谷川 翔さん(高校1年)  
憲昭さん(会社員) 遙さん  
(大学1年)吉子さん(看護師)  
巽さん(中学2年)

## 家族に責任をもって

妻が看護師をしている共働きの家庭なので、私も家の事や子どもの世話をしてきました。家事が嫌いなほうではないので苦にはなりません。むしろ、子どもたちと過ごした楽しい思い出が数え切れないほどたくさんできて良かったと思っています。ただ、子どもに接する場合、女性の感性でしかできないものがあると感じますが、逆に男性の感性でしかわからない場合もあるので、臨機応変に対応しました。

今でも心の痛みとして残っているのは、妻が準夜勤の日の子どもたちとの入浴の光景です。4歳の長女がひとりで入浴した後、1歳数ヶ月の長男を抱っこして風呂へ。長女を呼び長男を預けて、生まれたばかりの二男を抱っこして風呂へ。この間、長男はタオルにくるまれ、横寝のままミルクを飲んでいました。

このように、何かと不便であったろう共働きの家庭で育ちながらも、3人の子どもたちが間違っただに進むことなく自力で大学・高校と道を切り開いてくれたことを誇りに思っています。

《妻より》 夫の協力がなければ、共働きはできなかったと思います。特に夜勤の時も家事・育児ともに行ってくれた事に感謝しています。

## 団塊世代



いわき市明治団地  
本多 陽一さん・恵子さん

## お互いを尊重しあって

我々団塊の世代以降は、戦後の教育を受けた世代であるので、「男だから」とか「女だから」とかの差別意識は少なくなっていると思います。共働きの家庭であった私たちも、いつもお互いが協力しあって何事も一緒に行うようにしてきましたので、特に妻と夫が役割を分担して生活するということはありませんでした。

現在は、息子の家族とともに5人で暮らしていますが、妻と一緒に趣味の展示会や音楽会などに参加したり、在職中の研修で知り合った仲間4人とそれぞれ夫婦同伴で年に2~3回の小旅行を楽しんだりしています。

男女共同参画については、あまり意識せず、自然体でお互いを尊重しあい協力しあって生きていくことが大切ではないでしょうか。

《妻より》 夫婦だからといって、同じ趣味を持たなければいけないということはないと思います。お互いを尊重しあって、協力し、共に学びあえればよいと考えます。